

シリーズ  
日本の歌謡史を彩った作家達  
**昭和の歌人たち**

～第34回 船村 徹～

(3月1日 中野サンプラザ)



JASRAC 主催  
**EVIENIT**

戦後の復興や高度経済成長を遂げた「昭和」。この激動の時代に、日本の音楽史に大きな足跡を残した作家に焦点をあて、時代背景とともにその作品と人物像を紹介するシリーズ。

今回取り上げたのは、歌謡界を代表する作曲家で、昨年、文化勲章を受章、2月16日に惜しくも亡くなられた船村徹氏。日本人の心に今も生き続ける珠玉の歌謡曲の数々を紹介した。

開演に先立ち、いではく会長がJASRACの事業内容を説明し、「本日は船村先生の門下生を中心とした歌手の皆さんが、ご冥福をお祈りしながら船村メロディーを伝えるので、たくさん拍手を寄せてほしい」と挨拶した。



今回のゲストは、音楽評論家の小西良太郎さん。船村氏について「徹底してこだわって、独自の世界を作り上げた人。酒の席でも良い言葉をぼそっと語られるので、お話ししている時はいつも気が抜けなかった」と語った。



ゲストの小西良太郎さん(左から3番目)

船村氏の兄・福田健一氏と盟友の高野公男氏は、どちらも若くして亡くなっており、二人の死は船村氏の人生に大きな影響を与えている。

船村氏の命日となった2月16日は、兄・健一氏の命日でもある。戦争が激しさを増していた1944年、乗っていた輸送船が攻撃を受け、健一氏は23歳で戦死。船村氏は毎

年、神社への参拝を欠かさなかった。

盟友・高野氏と船村氏は「日本の歌謡界を牽引していく」という壮大な夢を抱いていたが、コンビでの出世作『別れの一本杉』がヒットした直後に、高野氏は肺結核で亡くなった。氷川きよしさん、大石まどかさんが代表曲『あの娘が泣いている波止場』『三味線マドロス』をそれぞれ披露したほか、高野氏の没後発見された詞に船村氏が作曲した『男の友情』を、鳥羽一郎さん、天草二郎さん、静太郎さん、走裕介さん、村木弾さんの5人で切々と歌い上げた。

船村氏は新しい才能の発掘にも力を注ぎ、仕事場の「楽想館」では、多くの内弟子が寝食を共にした。走裕介さんは「どこに出ても恥じることはない人間になりなさいと教えていただいた」と、船村氏とのエピソードを語った。

船村氏は美空ひばりさんに多くの作品を提供しているが、録音現場ではプライドをぶつけ合う戦いが繰り返された。由紀さおりさんが『哀愁波止場』を、島津亜矢さんが『ひばりの佐渡情話』を、天童よしみさんが『みだれ髪』を披露した。

このほか、大月みやこさんが『女の港』を艶やかに歌い上げ、会場を沸かせた。

「歌は聴く者の心に響いてこそ歌であり、心に残ってこそ歌である」という言葉を遺した船村氏。これからも船村メロディーを歌い継いでいく強い決意をこめて、最後に『宗谷岬』を出演者全員で歌唱。満員の会場からは盛大な拍手が送られ、幕を閉じた。



鳥羽一郎さん



氷川きよしさん



天童よしみさん



島津亜矢さん



大石まどかさん



大月みやこさん



(左から) 村木弾さん、走裕介さん、静太郎さん、天草二郎さん